

小説における人間像の造型

三 輪 誠 一

The Creation of Characters in Fiction

Seiichi Miwa

1

Seidensticker 氏が日本の近代小説を論じた論文、「異形の小説」の中に大要つぎのような記述がある。「もし西洋の読者が日本の近代小説を読んだならば、彼等の通念となっている小説の形式やジャンルの概念が、かならずしも普遍的なものでないということをお知らせされるはずである。」これは日本の近代小説の諸作品と西欧のそれとを比較対照する時、日本にははなはだ異様な姿を示す作品が数多くあるということをお述べているのである。西欧の近代小説の概念とは、19世紀に西欧において発達し、世紀末までにその頂点に達した小説の諸作品から帰納された概念を指す。では西欧の小説の形式やジャンルの普遍的な概念とは具体的にはいかなるものか。それは小説が緊密に構成されたプロットをもち鮮明な人間像を造型する文学ジャンルであるということである。これを言いかえれば、小説がひとつの文学ジャンルとして成立するためには、物語性 (narrative value) と作中人物の性格描写 (characterization) をもたなければならぬということである。19世紀後半から今世紀の初頭にいたる間に出現した西欧の小説の代表的作品が、上記の小説の二要件を具備していることは、われわれのよく知る所である。私はここで西欧の小説読者が小説について持っている一般的な概念を更に具体的かつ平明に説明するために、Walter Allen がその著書 *Reading a Novel* の中で述べている言葉を借用する。その大意は、「小説とは何かと定義する試みには、今まで誰もが失敗しているのです、私もこれは試みない。私はまず小説は主として人間にかかわるも

のであるという仮定から話を進める。われわれは何故に小説を読むか？ これにはいくつかの理由があるだろうが、それらの理由の基本となるものは物語を読むという、昔ながらの読者の素朴な喜び、事件の連鎖の中でつぎに何が起こるかを知りたい欲望をみたす喜びである。物語を読む楽しみの根本は、結局物語それ自体、すなわち *what-happens-next* である。しかる後にわれわれは事件を起こし、また事件に遭遇する作中人物について知りたいと思う故に小説を読む。」というきわめて簡明な小説の二要件にかんする説明である。この説明だけでは小説の *narrative value* すなわち小説のプロットは、作中人物の性格描写に優先する貴重な要件であることを主張しているようにみえるが、Allen の著書を通読すれば、彼の真意はプロットよりも人物の性格描写に重点をおいていることが分る。私は小説の二要件のうち特に作中人物の性格の着想、特徴的な人間像の造型に到達するプロセス等について考察しようと思う。

2

まずはじめに、私は英米文学における小説論の中からその一部を紹介する。英米の小説論の諸問題の中で重点のおかれるのは作中人物の性格描写論である。小説論者たちは小説と、小説を享受する読者との関係から考察を始め、読者の視点から、小説の読後に読者の記憶の中に鮮明に残る印象の種類についてつぎのように述べる。「性格の創造はすべての偉大な小説家の達成した、もっとも注目すべき成果である。小説の読了後、しばらくの時を経てその小説のプロットを詳細に話すことのできる人はきわめて少い。しかし大抵の読者

は作中人物の性格をよく記憶する。われわれは日常の談話の中で作中人物の性格を話題にする。」

(大意) 同様の趣旨をつぎのように述べる論者もいる。「いかなる性格にせよ、生けるがごとく見える性格こそ小説におけるもっとも重要な唯一の要素である。小説の文体やプロット構成の巧みさの故にその小説を記憶する人はいない。長篇小説、短篇小説のいずれにしても、万人に訴える人物の性格こそ小説の生命である。」(大意) 英米の小説論者はほとんどすべて、小説の長短いかんにかかわらず、作中人物の性格創造を作家の重要な責務と考える。上記二人の論者の主眼とする所は、小説のプロット以上に人物の性格創造の重要性とその文学的効果を強調するものである。これによってわれわれは Seidensticker 氏が日本の近代小説の代表的作品(永井荷風、志賀直哉、川端康成等の諸作品)を異形の小説と呼ぶ理由をほぼ理解することができる。Seidensticker 氏は上記の日本作家の作品の中には、西欧の小説の成立の二要件(作中人物の性格描写と緻密に構成されたプロット)のひとつあるいは両者を欠く小説が少なからずあるという。日本の近代小説についての彼の批評を考察することは別の機会にゆずることにして、ここではただ川端康成の作品についての彼の批評の要点を紹介するにとどめる。彼の意見によれば川端の小説には西歐的な意味での形式的統一、すなわち物語の発端、展開、終末という整然たる構成が認められないという。(ただし例外として「眠れる美女」は緊密な構成上の統一を示しているという。)しかし彼は人間像の創造については、川端を高く評価し、特に「雪国」の女主人公の性格描写の見事さを激賞していることを付記しておく。

3

作者が小説の執筆を開始する前に彼が作中人物の特徴的な性格を着想する端緒はどこにあるのであろうか。作者はこの端緒を社会生活における彼の諸経験や、人間についての彼の思索の中に見出すであろう。別言すれば彼は自分が創造しようとする人間像の原型(prototype or model)を外部的社会の中に、または彼の内部世界に見出す。英米の小説論においては作者の胸中に描かれる作中人物の、未だ十分に明確でない当初の

image を source と呼ぶ論者もいるが、私は使いたない model あるいは prototype という語を用いることにする。

ツルゲーネフの小説の中の主要人物に実在のモデルのあったことはよく知られている。彼の小説「ルージン」の主人公ルージンのモデルは革命家バクーニン(1814—76)であるといわれる。(実在の人物バクーニンは生涯を革命運動の中に過したが、晩年には革命運動にも幻滅を感じ、不遇のうちにスイスのベルンで客死する。)また「父と子」の主要人物バザーロフは、作者ツルゲーネフがみずから記しているように、作者を驚かせた特異な個性をもった一人の若い医師であった。ツルゲーネフの作中人物の例は、作者が外界に作品の主人公のモデルを発見した場合である。もう一つの場合、すなわち作中人物のモデルを作者自身の内部に見出す例である。周知のように Flaubert は彼の *Madame Bovary* について、友人への書簡の中で “I am Madame Bovary” と述べている。作者が自己の内部に特異な人物のプロトタイプを発見して小説の執筆を開始するということは、彼が自伝小説あるいは告白小説を書くということの意味するのではない。これについて小説美学はつぎのように説明する。人間の性格はいくつかの部分や側面をもつものであり、これらが結合あるいは統合されて一個の性格を形成する。しかしこれらの部分、側面のすべてが一人の人間の常時の姿として表面にあらわれることはない。人間の性格を形成する諸要素の中のあるものは、彼の内部に深くかくされていて他者の眼には見えない。このことを別言すれば、人間はただひとつの自我(self)をもつものではなく、複数の自我(selves)をもつということである。人間は自己の内部にひそむ好ましからざる性格のある部分と側面とを自らの力でおさえて表面にあらわれることを禁ずる。それは顕在化する可能性をもつが、各人がその顕在を恐れてそれを胸の底に秘めておく自我である。このような性格のうちのある部分、側面をわれわれは潜在自我(potential selves)と呼ぶ。作家は作品の制作にあたり、彼の内部深くにかくされた潜在自我のいくつかを作品の中の諸人物に分ち与えて、それらを顕在化させる。潜在自我は顕在自我に対し、また潜在自我

相互の間においても対立し相反発するものであるから、たがいに対立し、相異なる作中人物は物語の進行と展開に各人各様の仕方に参加する。したがってそこには葛藤や衝突が生ずる。物語は人物の性格や葛藤の種類によって悲劇ともなり、喜劇ともなる。ドストエフスキーのカラマーゾフ兄弟の各人の相異なる性格は作者自身の性格のいくつかの側面、すなわち彼の複数の自我の投影であるといわれる。Flaubertの「Bovary夫人は私だ。」という発言も彼の複数の自我の一つの描出である。各種類の特異な性格を創造することのできる作家は、彼の内部に多種類の潜在自我をもつ芸術家である。したがって作者の潜在自我は作中人物の美德ともなり、また悪徳ともなって読者の前に出現する。

4

作者が外界に、あるいは彼自身の内部世界の中に見出したモデルは、作中人物の単なる素材または素描であり、そのままの姿ではまだ荒削りの原形にすぎない。これに修正や改変の手を加えて生々とした人間像とするのは作者の想像力である。Henry Jamesはこのような作家の想像力を坩堝(crucible)にたとえてつぎのように説明する。“We can surely account for nothing in the novelist's work that hasn't passed through the crucible of his imagination, ……” 「小説家の作品の中にあるいかなるものも、彼の想像力という坩堝を通過しなかったものは皆無である。」というのが、Jamesの説明の要旨である。不完全な原形の人物像は作家の想像力によって補足、改変された後、生彩ある人間像に変容して小説作品の中で躍動するのである。

諸作家の造型した人間像、作中人物とプロットとの関係等については、今後作品の実例によって改めて具体的に論ずる予定であるが、この小論はその序説である。

(昭和54.7.29)

Bibliography

- Allen, Walter, *Rearing a Novel*
 Boulton, Majorie. *The Anatomy of the Novel*
 Hale, Nancy. *The Realities of Fiction*
 James, Henry. *The Art of the Novel*
 Liddell, Robert. *A Treatise on the Novel*

サイデンステッカー, (安西徹雄編訳)

異形の小説 昭和47年2.15 南窓社

佐藤清郎, ツルゲーネフの生涯

昭和52年6.30 筑摩書房

サイデンステッカー, 「川端康成」現代のエスプリ,

35号 昭和44年1.1 至文堂